

日本海新聞—大阪日日新聞連携

# 関西からのメッセージ

マンションのベランダなどに設置されるアルミ手すりの設計、施工を手掛け、業界では当たり前とされる施工法「後付け工法」のパイオニア、三東金属の社長を務める吹野勝さん(69)は鳥取県米子市淀江町出身。1960年には米子東高硬式野球部主将としてチームを甲子園大会準優勝に導いた。独力での起業から30余年、大阪の地で着々と足場を固めた歩みや球児だったころの思い出などを聞いた。

—創業の経緯は。

高校卒業と同時に旧三和銀行に就職したが、ずっと起業したいと思っていたので1年半で辞めて立命館大学に入学した。卒業後はいろいろな経験を経て建材関連の企業に勤め、そこがつぶれたので不良在庫を全国に売り歩いたのをきっかけに、1978年に創業した。

—どんな事業を展開しているのか。  
マンションなどのアルミの手すりの設計、製作、取り付けを

## 三東金属社長 吹野 勝さん(米子市出身)

三東金属 堺市北区百舌鳥梅町3丁目。資本金1千万円。1986年設立。アルミ手すりを中心にアルミ製作物、ステンレス、スチール製作物物の設計、製造、施工を手掛ける。



起業への歩みや高校時代の甲子園出場の思い出を語る吹野さん＝大阪府堺市の三東金属

ふきの まさる 1942年、淀江町(現・米子市)生まれ。61年、米子東高卒。同年、旧三和銀行に入行するが大学受験のため63年退社。67年に立命館大学卒業後、新泉金属などを経て78年に三東金属を創業した。

# 「適材適所」が大切

一貫して手掛けている。アルミのほかにステンレスや鉄など、何にでも対応できるようにしている。手すりのオリジナルの型が40種類くらいあって、これらを組み合わせる顧客のニーズに合う製品を提供している。

—長い不況で中小企業を取り巻く環境は厳しさを増している。業界の現状は。

手を組むので2工程が省け、コストや労力を軽減できる。国内メーカーで初めて後付け工法を手掛け、浸透するまでに時間はかかったが、一度採用されると次

—関西で頑張っている同業他社は数社しかないのではないかと。最近では現場の数が少なく、価格のたたき合いになっている。利益率が悪くなるので、原価計算の厳密化やコストダウンなど、常に原価意識を持って仕事をしています。当社の場合、仕事量は

減っていないが、単価が低くなっている。売り上げは横ばいといったところ。

—甲子園準優勝の思い出やその経験で得たものとは。

試合後、伯備線で鳥取県に入った瞬間に、沿線でみんなが旗を振って出迎えてくれたのが印象に残っている。メンバーの中で抜きんでた選手はいなかったが、日本一の練習をしてきたと思っていたので、練習を思えば試合は非常に楽しかった。大学で代理監督を経験した際に、適材適所で人に力を発揮してもらうことの大切さを学んだ。会社を経営するようになってからも、その経験が生きている。

—ふるさとへのメッセージを。

野球の経験から言うと、何か一つに集中して取り組むことは、その後の人生に大きなプラスになる。そのことを鳥取県の人たちに知ってもらいたい。

(聞き手は西部本社・岡宏由紀)

は。従来、手すりを付けるためには溶接で固定しモルタルで下部は。100%が後付け工法で施工されている。現在、ほぼ必ず採用された。現在、ほぼ100%が後付け工法で施工されている。当社の場合、仕事量は

日本海新聞ホームページで、吹野さんのふるさとへのメッセージ動画が見られます。